〔巻頭言〕

ファカルティ・ディベロップメント（FD）活動としての教育実践研究

教育能力開発委員長　松下 光子

本学の紀要には、教育実践研究という論文の種類がある。教育実践を素材にし、新しい知見や教育の改善、発展に寄与する研究とされている。教員自身が日々意図的に行っている教育実践を研究的にまとめ、評価・改善につなげる取り組みが多く報告されている。教育実践研究の実施プロセスにおいては、ともに教育活動を行っている教員間のディスカッションが行われ、実施している教育の目的や方法の再確認や共通認識の形成、評価と改善、新しいアイデア創出の機会となる。そのような経験は、特に教育経験の少ない教員にとっては成長の機会にもなると期待される。さらに、紀要に掲載されて公表されることによって、学内、学外の教員や看護職者と共有することができる。

これまでに、私自身も教育実践研究の報告を行ってきた。それらの報告は、所属している地域基礎看護学講座の教員メンバーとともに取り組んだものである。地域基礎看護学講座では、地域基礎看護学の授業全体に関する改善・改革を講座として推進する取り組みを続けている。講座として取り組んだ教育活動を紀要に報告するとともに、講座の教員がそれぞれ紀要に掲載した教育実践研究報告の内容や各授業科目の内容を報告しあって共有し、地域基礎看護学としての教育内容と学士課程４年間の学習プロセス、卒業時到達目標の明確化をめざした検討会を行っている。話し合いの時間を確保することも大変な状況ではあるが、教育活動をまとめたり、講座全体の教育内容を考えてディスカッションを行うことは、その中で驚いたり納得したりしみじみしたりハッとしたりと、おもしろい経験である。そのように気持ちが動くと自分自身の中に気づきが蓄積されていく。それらの取り組みの中から、授業展開のアイデアが生まれて実施したものもあるし、地域基礎看護学としての教育内容や学生の学習段階が少しずつはっきりしてきていると感じている。

大学における FD 活動は、大学設置基準の改正により 2008 年４月から義務化された。本学では、開学年度の 2001 年３月に教育能力開発委員会が設置され、FD 活動の企画・運営を担ってきた。本学のＦＤ活動は、教育能力開発には講義を受け知識を得るといった受身の活動のみではなく、主体的な参加が不可欠であるとの考えのもとに進められてきた。FD として取り上げるテーマについて教員の意見を募集し、また、研修会においては小グループでの討議を多く取り入れるといった取り組みを行ってきた。2007 年１月に実施した本学の教育能力開発に関する教員アンケート結果から、教育能力開発委員会が実施してきた各活動と教員の能力開発とのつながりについて確認できた。それと同時に委員会が意図して実施したこと以外で、教員としての能力開発につながっていると思うこととして、日常行っている教員間での授業検討、学生指導など教育活動、紀要・研究などの研究活動が能力開発につながっているとの意見が挙げられた。自分たちが行っている教育実践活動を話し合ったり研究としてまとめたりすることは、忙しい日常の中で深く考える機会であり、当事者としての主体的なかかわりを通して教育能力を高める場面になっている。

大学教育、看護学教育を取り巻く状況は、時々刻々と変化している。教員は、学生や看護実践の変化を日頃の教育研究活動を通して感じている。教育活動は看護活動と同様に、自分がいるその場においてどう取り組んだらよいのかはそれぞれの場の条件によって異なる。一人ひとりの教員が自分のいる場で考え、工夫していく必要がある。それは、教員自身の実践をいかに改善するか、教員の教育能力をいかに高めるかということである。看護実践研究を重視する本学らしく、教員自身の教育実践研究の成果が紀要において数多く報告され、さらにそれらの報告が教員間で共有されて教育実践活動の改善に活かされることを FD 活動の推進という視点からも期待したい。

（地域基礎看護学講座准教授）